
神の子供たち

ウララララ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神の子供たち

【Nコード】

N 6 6 3 1 M

【作者名】

ウララララ

【あらすじ】

三神亮輔と三神奈々。二人は血のつながりの無い家族だ。そんな二人に、ある日ある男が襲い掛かる。亮輔は、突然聞こえてきた声に導かれ・・・

作者の描写力不足が酷い、致命的なバトルストーリー！

あんまりタイトルに意味がない気がするけど、どうすれば・・・

亮輔と奈々（前書き）

作者の文章力は著しく欠如しております。それでも許してくれるやさしい方、大募集。初投稿ですが、どうかお手柔らかによろしくお願いします！

亮輔と奈々

「はい、じゃあ、この問題を・・・」

「せんせー、また三神君^{みかみ}が寝てますー」

女生徒が、一人の男子生徒を指差した。

「・・・・・・・・ぐう・・・・・・・・」

教師は、またか、といった風に頭に手をやる。もはやこれが当たり前の光景になりつつあるのは、そしてこの状況に慣れてしまっているのは、一教師としてどうなんだろうかと彼女は思った。そして、実に幸せそうな寝顔を浮かべる彼を見て、溜息を一つ吐く。無視して、授業を進める。

「ほつといていいぞ。じゃあ、この問題を・・・」

高い、間延びした機会音が、スピーカーから流れた。同時に、教室中に充満していた緊張感が一気に開放された。と同時に、鞆をささと取り出し中に教科書を詰め込んでいく男子生徒が一人。先ほどまで居眠りをしていた男子生徒だった。

「明日はこの続きからな。日直！」

きりーつ、れい。日直の号令にあわせたりまったくあわなかったり。それというのも、これが彼、彼女らにとっての最後の教科だったからだ。一気にテンションが放課後モードに突入してしまっている生徒たちに、最後まで息を合わせろというのも無理な話なのだろう。

「三神！」

教室中が静かになり、生徒たちの視線が一点に向けられる。その先にいたのは先ほどの男子生徒。彼は「へっ？　僕、なにかしましたか？」という無邪気な目をしている。これが極めて真面目な様子なのだから、どうしようもないと彼女は思った。

「黒板の問題写しておけよ。明日、この問題からだからな」

「な、ふああ・・・何で俺に？　俺、こんなの習ってないんだけど」

「寝てたからな。いいじゃないか、予習と復習が一気に出来るぞ」

「わー、お喋ってんなわけあるかつ！　って、消すなあ！　写すから、なつちゃんちよつと待グフォアツ！？」

「なつちゃん言うな！」

少年の額に前方から放たれたチョークがめり込んで、少年は一つ叫び声を上げたあと悶絶していた。チョークを投げた張本人は、涼しい顔で黒板の文字を消していく。このクラスの担任でもあるなつちゃん・・・こと三神^{みかみなな}奈々は、帰りのHRへと話題を移す。

「さて、最近近くで物騒な事件が起きている。幸いこの学校で被害に遭った生徒はいないが、十分に注意するように。くれぐれも寄り道なんてするなよ・・・言うだけ無駄か」

教師の話を聞いている生徒なんてごく一部。その一部のメガネをかけた女生徒と目が合うも、彼女は目を逸らしてしまう。次に、先ほ

ど自分がチョークを投擲した男子に目を向ける。まだ、頭の周りを星が回っているようだった。

「とにかく、明日も全員元気に会えることを祈る！ さよならっ！」
さよーならっ！ と教室中に元気な声が響いた。現金なやつらだ、と奈々は思った。

「先生」

教室の人数もだいぶ少なくなった頃、最後まで残っていた女生徒が奈々の方にやってきた。メガネをかけたさつき目が合った女生徒だ。

「おう、どうした天野。早く帰ったほうがいいぞ。今でなくてもお前はいろいろ危ないんだから」

「どういう意味ですか？」

「ん・・・それは私の口から言うのはいろいろ憚られるが・・・立場的にも性別的にも・・・」

「何を言って・・・」

天野、と呼ばれた女生徒は、クラス内でもあまり目立たない、物静かな生徒だ。そして、本人にその気はまったくないみたいだが、儚さを宿した瞳と、整った顔つきで、男子からの人気も意外と高く。そのせいか、彼女からすれば天野という女生徒に対する印象は、気弱でおとなしい、実に『狙われやすい』生徒だった。

「それで、なんだ？ 何度も言うが早く帰ったほうがいいぞ」

「大丈夫ですよ、私は。こう見えても強いんです」

そう胸を張った彼女は、どこか芝居がかっている風にも見える。何が強いのか。そう聞こうとも思ったが、聞いたら負けなのだな、こういうのは、きっと。

「それよりも、三神君はどうするんですか？ その様子だと、しばらく起きそうにありませんけど？」

「ああ、大丈夫だ。私が責任を持って家まで帰すから。だからお前も安心して帰れ」

「でも・・・」

引き下がる天野の肩をそつと叩く。天野は、心配そうにまた眠ってしまっている三神君と呼んだ男子生徒に目を向けながら、小さく頷いた。しかしこれは、了承ではなく、妥協の合図だった。奈々はそれに気づかなかったが。

「わかりました。私は帰ります。先生、一つ約束してくれますか？」

「ん、どうした？ 真剣な顔して」

そう、奈々が初めて見た、かもしれない表情だった。真剣で、凛々しい声色。そんな彼女の目にいる自分は、気の抜けた表情をしていただろう。

「また明日、元気でおはようって言ってください。できれば、三神君も一緒に。では、私は帰ります。さようなら」

「ああ、さよなら・・・」

それは、さっき私が言ったことだろう？

「わかってるさ、誰に言われずとも・・・」

そう、彼女は思った。

「この毎日を、誰にも壊させるものか」

自分の机に顔を伏せて、寝息を上げている少年の頭を撫でる。見つめる視線には、深い、慈愛の念が込められていた。

「もちろん、おまえにもな？　一輝^{かずき}」

頭を撫でる手は止めず、教室の端に目も向けずに声をかける。そこから、明るい響きの声が上がった。

「何が？　なっちゃん」

「なっちゃんと言う・・・っ!？」

「安心してよ。僕は何もしないよ。今はまだ、ね・・・」

いつのまにか、一人の少年が奈々の真横に立っていてその頭を撫でていた。瞳を閉じ、口元をニヤリと上げてうんうんと頷いていた。

「やめんか・・・っ!」

奈々は迷惑そうにしながらも、拒むことはしなかった。恥ずかしそうに、頬を赤らめ身を任せている。

少年が奈々の頭をなで、奈々はまだ寝息を立てている少年の頭を撫でている。その様は、異様以外のなんといえいいのか。

「さあ、本題に入るとしようか。おっと、もっと欲しかった？ また今度ね」

頭を撫でるのをやめてしまった少年に、物欲しそうな視線を向けてしまっていた。そんな自分を、認めてしまっている自分が嫌だった。少年に、振り回されている、自分が。

「僕は、これから少し探し物をしなきゃいけないんだ。そこで君に預かって欲しいものがある。これだ」

少年が取り出したのは、縦長の小さな箱。奈々が開けて中を見ると、ナイフが入っていた。

「これって・・・」

寝息を立てている少年と、横に立っている少年を交互に見る。横にいる少年と目が合い、微笑まれる。バツと、目を逸らした。まるで恋する少女のようだと、心の中で自分にうんざりしながら。

「ああ、僕が持っていてても仕方がないものだからね。特に、これらの僕にはね。なら、奈々に持っていて欲しいんだ。奈々はこれを使えないだろ？ これは使い方を誤れば恐ろしいものになる。君も知ってのとおりね」

「だから、私に・・・か」

グッと、ナイフの柄を握り締める手に力を込める。奈々は自分にとってこれはただのナイフでしかない、そうわかっているのに、禍々しい何かを感じた。

「でも、いつか帰してもらいに来るよ。そのときは、すぐに返してね？　じゃ、またね」

「ま、待て！」

「僕、急いでるんだ」

「声ぐらい、掛けて行ったらどうだ？　弟、だろ？」

少年は、その言葉に動きを止める。何かを、思い返すように床を見つめる。

「いつもこうやって亮輔（はやうすけ）が寝ているときや他に誰もいないときばかり狙って私に会いに来て。本当は、声をかけたくて。話したくて、仕方ないだろ？　だって、」

「・・・うるさいよ」

少年が一言呟いた。それと同時に、奈々は自分の周囲に圧迫感を感じた。そして、少年に見据えられた瞬間、これが自分の最後なのだと錯覚した。それは、少年の瞳に込められたたった一つのもののせいだった。

狂気。それも、圧倒的な全てを飲み込むような。喉をグッと飲み込

む。少年から目を逸らせない。体から嫌な汗が流れてきたのを感じたとき、周囲を包んでいた圧迫感は、一瞬で霧散した。

「禁則事項です、ってね。僕のこいつへの思いは、本当に、言葉では表せないんだ」

そう言っで見つめる少年の瞳は揺れていた。奈々には、それが何を意味しているのか、理解は出来なかったが、それでも一つだけ分かったのは、この少年の言葉が心からの言葉であることだった。だから何を言えいいのか分からず、しばらく無言になってしまった。

「名残惜しいけど、しばしお別れだ。もう引き止めないでくれよ？」

「あ、おいつ!？」

じゃあ、と手を挙げて少年は『窓から飛び降りた』。奈々は窓の下を見るが、そこには誰もいなかった。

そのまま、上を見上げた。真っ暗な空には、満ちた月が浮いていた。

「今日は、満月か・・・お、起きたか」

「あり、なんか辺り暗い・・・おはよ、なっちゃん」

「なっちゃん言っな。さて、帰るか」

「今・・・誰かいた？」

奈々は、一瞬息を止めた。まさか、気づいているとは思えないが。奈々の口からは、とっさに嘘が飛び出していた。

「ああ、さっきまで天野がな。お前のことを心配してたぞ。隅に置けないな、お前も」

つい、ふざけてしまう。それと同時に、嘘はついていないよな、と自問自答する。

「うあゝ、もう真っ暗じゃん。何で起こしてくれなかったの？」

「さっきも言っただろう？ 明日の授業は亮輔からだからな。黒板の文字は結局写していないだろう？ だから、私が帰ってから教えてやる。だから、寝かせてやったんだ。覚悟しろよ？ 今日のは激しいからな？」

「それは、性的な意味で？」

ボカッ。奈々が、亮輔、と呼んだ少年の頭を拳固で殴った。亮輔は頭を抑えた。

「じよ、冗談だろ・・・？」

「言っていい冗談と悪い冗談があるだろうが」

「う・・・ごめん」

「ん、よし」

奈々は開けたままにしていた窓を閉めて、机から立ちあがってバツの悪い顔を浮かべていた亮輔の頭に手を載せて、左右に動かす。

「子ども扱い、いいかげんやめろよな・・・誰も見てないからいいけど」

「そういうところが子供だな、こんな時間だから夕飯は何か惣菜でも買うのでいいか？」

「ま、俺のせいだしね・・・その代わりその後でなっちゃんをいただグホッ！」

「亮輔・・・」

「う、ごめん、すいません、もう言いません、反省はしています、でも後悔はしていない！」

「なんの宣言だ！」

やっぱり子供だ、そう奈々はそう思う。こんな関係がいつまでも続けばいい。この距離感が、交わされる会話が、向け合える笑顔が、何よりも今の彼女には尊いと。大切にするべきものであると思っていた。

学校の屋上から、帰る二人を眺める影が一つ。

「奈々、いや今はなっちゃんでもいいか。使い方を誤らなければ恐ろしいものになるって言ったけど、僕はあえて誤らせるつもりでいるんだ。そのほうが面白いから、ね・・・お別れだ、『クルス』。せいぜい、新しい使い主のところで幸せになるといい。さて、僕も僕のために動くとするかな」

それは誰に当てた言葉か。それは誰にも当てた言葉ではなかったか。
とにもかくにも、少年の姿は屋上から掻き消えた。

動き始めた運命（前書き）

戦闘ってどうすればうまく書けるんでしょうね？

動き始めた運命

奈々と亮輔は、学校を出てから近くのスーパーに寄って夕飯を買い、今は家の帰路の途中にある公園の横の歩道を歩いていた。もちろん、荷物もちは亮輔だ。とはいっても夕飯一食分なのでそれほどの重荷にはなっていない。その亮輔のわずか前を歩く奈々は、突然亮輔のほうを振り返った。亮輔は止まる、どころではなく若干後退した。そのままの位置で停止してしまうと、どうにかなりそうだったからだ（理性的にはなく、物理的に）。目の前にはなにやら苦しそうな顔をしている奈々がいた。苦痛に呻いている、といった表情ではなく。心苦しいことがある、といったような。当然だった。奈々の頭にあるのは、それだけの罪科を背負った問いだったからだ。

「亮輔」

「なに？」

「家族・・・欲しい？」

亮輔は、しばしポカーンとしてしまった。何を聞いているのかと、そう思ったからだ。あと、漫画で見た『子供・・・欲しい？』みたいなトーンだったために、思考回路はショート寸前だった。

「家族って・・・なっちゃんがいるだろ？」

「そういうことじゃなくて、亮輔の、本当の家族」

「だから、それがなっちゃんだったの」

俯いて、心なしか震えているように見える奈々の様子を、亮輔はとも見ていられなかった。

「だから、そういうことじゃなくてっ」

いつもの、強い奈々のことが、亮輔は好きだったからだ。そこに恋愛感情などというものは、もちろんなかった。強い、憧れ。こういう風になりたい、そんな羨望のまなざし。それを、亮輔は奈々に持っていた。

「そういうことだよ」

奈々は、先ほどの一輝との邂逅で、ある思いが甦っていた。だから、一輝に、亮輔に、あんな、こんなことを聞いてしまっていた。どうしても、負い目を忘れることが出来ない。忘れることは罪だし、忘れてはいけないということも理解していた。それでも忘れたいと思うのは、長く亮輔といればいるほど、彼のことを、まるで本当の息子のように思ってしまうからだ。そしてその度に、今まで以上の何かが奈々を襲うのだ。

「俺には父さんも母さんも・・・いたんだろうけど、さ。二人には申し訳ないんだけどさ。俺、なっちゃんがいいんだ。もうなっちゃんじゃないと嫌だよ」

震える奈々の身体を、片手でそっと引き寄せて、自分の胸に顔を当てるように亮輔は抱きしめた。だんだんと、身体の震えが収まっていく奈々に、亮輔は一息ついた。これを誰かに見られたらどうするか、なんて思いながら。

「しってつか？ いけねーんだぜ、近親相姦はよお？」

静かな夜に、男の声が響いた。公園のほうから足音が聞こえてくる。二人は急いで身体を離れた。

「なあ、セブン？ いけねーよなあそれはよ」

決して、恥ずかしいから、とか誰かに見られると云々などという理由からではなく。

「最近のガキはすすんでるんだなあ。ずいぶんと大胆になったもんだ、俺が『寝ていた』間によ」

あのままの体勢ではまずいと、身体の奥が囁いたからだ。

「セブン、聞いてんのか、おい」

男は、大きな背広を羽織っていた。ポケットに両手を突っ込んで、奈々のほうに話かけている、ように亮輔には見えた。

「ファイブ・・・！」

隣に居る奈々から苦々しげに呟く声が聞こえた。二人は知り合いなんだと亮輔は理解した。決して、仲が良くなどないということも。目の前の男は、奈々の声が、聞こえたのか聞こえないのか口の端を吊り上げた。そういつて親しげに両手をポケットから出すと大きく開いた。

「覚えててくれたのか、嬉しいなあ。本当、嬉しすぎて・・・」

右手を亮輔と奈々のほうに向ける男。その手は、まるで銃を形作るように、人差し指を伸ばし、親指を立てて、人差し指を二人に向けていた。

「消したくなる」

亮輔は、突然奈々に抱きすくめられると、今まで自分たちがいた場所が、何かに襲われているのを空中から眺めていた。気づけば、自分には奈々にお姫様抱っこをされていた。

「ちょ、なっちゃ・・・」

声をかけようとして、やめる。奈々の横顔が、今まで見たことがないものだったからだ。目の前の男を見据える視線には、憎しみの色が混ざっていた。着地して、降ろされると、奈々は男と亮輔の間に立ち、男のほうへ身体を向けながら亮輔に話しかけた。

「亮輔、これ持って逃げな」

奈々が、手に持っていたバッグを亮輔に投げ渡す。どこか形が膨らんでいるバッグに、亮輔は何が入っているか確認しようとするが、奈々に制止される。

「中身見たいなら家帰ってからにして。それと、教科書用意して待つてな。私はちよつと話すことがあるから」

「んだな。どいてなボーズ。今のそいつあよ、ボーズの知ってるセブンじゃねえぜ」

「そもそも、なんだよ。セブンって」

「それは、お前の知る必要のねえことだ、ボーズ。首を突っ込んでやいけねえことがある、何にもな。そうだろう？」

「こい、ファイブ。私を、殺^やすんだろう？ その代わり、手を出すなよ、亮輔には、絶対に」

「ああ、出さねーよ。誓っていいぜ。んじゃ・・・いくか」

ファイブと呼ばれた男がそういった瞬間、二人の姿が目の前から消えた。そして、大きな衝突音が響いた後、公園の真ん中に、二人の姿があった。ファイブの手には長い剣があり、奈々は素手で対峙していた。

「動かねえな、ボーズ・・・ぐっ!？」

ファイブが一瞬亮輔のほうを見て溜息を吐いた。仕方ないなあ、なあ？ という風に肩を竦めて奈々のほうを見ると、そこに奈々の姿はなく、背中に激しい衝撃が襲う。前のほうに飛び衝撃を和らげ、奈々に注意を向ける。奈々は、激しい憎悪と、認めたくはない、大きな高揚感に襲われていた。男は、その様子を見て楽しそうに、抑え切れないといった感じで笑いを浮かべる。

「けけっ、所詮てめえは俺たちと同類ってわけだ。楽しいかよ、戦うことがよ？」

「黙れ」

「あんなよ、おままごとなんかしててもよ、お前は所詮セブンなんだよ」

「……黙れ」

「さっきの、あのボーズの顔見たかよ？ お前を見る目によ、恐怖しかなかったぜ？」

「黙れえええええええええええええええええつ！！！」

その咆哮を、亮輔は、公園の外で聞いてしまっていた。ここにいるのは、危ない。それは分かる。逃げて、なっちゃんが帰ってきたときのために教科書を開いて待っていないければならない。それも、分かる。だけれど、なっちゃんを置いては帰れなかった。それはきつと、愚かな行動なのだらうけれど。

「なんなんだ、あいつ……」

突然現れた男。 なっちゃんとなにやら知り合いのようで、いきなり なっちゃんを殺すという。そして今、二人は殺しあっている、のだらう。二人が消えて、また現れて消えてそしてまた現れる。その繰り返しだった。亮輔には二人の動きがまったく見えなかった。逃げることも出来ず、近づくことも出来ない。そんな亮輔に出来るのは、奈々が無事であるように祈ることだけだった。

二人は、動きを止めて対峙していた。しかし、二人の様子には幾分か違いが生じていた。ファイブは欠伸をするほどの余裕を持ってお

り、一方の奈々は肩で息をする有様だった。

「・・・まさか、鈍った身体でここまでやるなんてな。まあ、そうじゃなきゃ張り合いがないか」

「ファイブ、これは任務なのか？ 契約で、私と亮輔は正式に『逃がされた』はずだが」

「いや。これは俺の単独行動だ。まあ、その相手がお前だったのは俺からすればラッキーかどうかってところだがな」

「・・・そうか、あの事件の犯人はお前だったのか」

「事件？ なんのことだかさっぱりだが・・・世間ではそういわれているのかもなあ。おれにはどうでもいいことだが」

「いいのか、まだ組織にいるんだろう、お前は？」

「いいのさ、誰かが殺^{ころ}しに来たら返り討ちにすればいい。そうだろう？」

「そうだな、だが・・・そのときは永遠に来ないな」

「なぜだ？」

「それは」

奈々は、大きく息を吸い込む。そして、今までで一番早く、強く、遅しく。動き出した。

「私が！ 殺^{しまつす}るからだ！ はあああああああつ！！」

心の中で、となえる。『オーバードライブ』

瞬時に、加速。そして、反応できていないファイブの背中を蹴りつける。男が再び前に飛んで衝撃を和らげようとする。その瞬間を狙い、前方からファイブの顔面を殴りつける。撃ち飛ばされたファイブは、声を上げることも出来ず、後ろに倒れそうになる。奈々はファイブの後頭部を下から蹴り上げ再びファイブを強引に立たせると左右に殴り続ける。

「これで、終わりだ！！！」

最後に高速での回し蹴り。ファイブは地面に打ち付けられ、ビクともしない。奈々が勝利を確信した。と同時に、さっきまでの自分は我を忘れてしまっていたことに気づき、思わず公園の外を見る。そこにいた亮輔は、いつもと変わらない風に見えた。が、その表情が一転恐ろしいものを見たようなそんな表情になった。

「終わりいいい??? 誰がだつて？」

声のしたほうへ奈々が振り返ると、信じられないものがあつた。血に、土に塗れたファイブの姿。しかし身体には既に傷一つついておらず、服がもはや布きれとなっているぐらいだった。口から血を流し、笑っているファイブの姿。

「おい、言えよおお・・・誰が、誰に、誰を、終わらせるんだ？」

奈々は、一步も動くことが出来なかった。その声の恐ろしさに、身が竦んでしまっていた。それだけでは、なかったが。その理由にフ

アイブは気づいているのか、ニヤリと口元を上げる。そして、ゆっくりと近づいていく。

亮輔は、何が起きているのか分からなかった。あの男が倒れて、それで終わったと思った。空気が変わったのを、この離れた位置からでも分かる。空気が、痛い。そして、再び大きい衝突音が聞こえたとき、奈々が吹き飛ばされていた。

動き始めた運命（後書き）

お粗末ですまんです。

覚醒（前書き）

拙い文章ですが、よろしければご覧ください。

覚醒

「ふはあああああつ！！！」

ファイブが手に持った剣を振りかざし、一気に振り下ろす。奈々は、すんでのところで剣戟を回避した。

しかし、一太刀避けるだけで身体全体が悲鳴を上げるように激痛を感じる。

「つつ！」

思わず、顔が歪み、額には汗が吹き出る。それでも、死ぬわけにはいかない。再び突っ込んでくるファイブの攻撃をかわす。そんなことが何回か続いて、これはジリ貧でしかないことに気づく。しかし奈々にはどうすることもできない。攻撃を避ける、そのための最低限の動きでさえこんなにも奈々に痛みを与える。その度に、身体の動きが鈍くなっていることに気づいて、知らぬフリをする。逃げるだけで精一杯。なら、逃げるだけで今はいい。逃げられている。それもどこまで続くかは分からないが、いけるところまでいつてやる。

「あつ！？」

何度続いたか分からない、そんな交錯も終わるときが来た。奈々の足に、もはや力は入らなかった。それでも気力だけで、足を、身体を頭を動かしていた。限界などつくに超えていたのだ。そして、ついに止まってしまった。もう、どこも動かない。身体は全部、頭ですらも。ファイブの蹴りを受け、吹き飛ばされる。声を上げることもすらも出来ず、身体を上げることも出来ない。ゆっくりと近づいてくるファイブの姿を、見上げることしか出来ない。だんだんと近

づく足音、大きくなってくるファイブの姿に、絶望感で打ちのめされていく。と同時に、これでよかったとも思っている自分がいる。さっさところなるべきだったと、それも亮輔自身の目の前で無残に殺されるのだ。嬉しいような、悲しいような。そんな複雑な気分だった。

「なっちゃん！」

思わず、叫んでいた。けれど、聞こえるはずも無い。どうすることも出来ない、自分の無力さに、歯噛みする。

「くそつ、俺は何も出来ないのかよ・・・なっちゃんがあんなことになってるのに・・・」

違う、と自分を奮い立たせる。

「違う、違う・・・！何も出来ないんじゃない、俺はきつと」

何もしていない。しようとすら、していなかった。帰ってから中を見るように言われていた不自然なほど膨らんだバッグを開ける。いけないことをしていると思ったが、こんなときで仕方ないと自分を納得させる。中に入っていたのは、教科書に何に使うか良く分からないビン、それと小さな細長い箱だった。

「なんだ、これ・・・」

細長い箱を開けると、入っていたのは小さいナイフ。さすがに果物ナイフって感じではないが。手に持った瞬間、声が聞こえてきた。

『あゝ、やっと私のこと取ったね！ イライラしすぎてこの姿なのに血管切れるかと思った！ あんたなんなの！？ 全然はつきりしないで！』

謎の声に、責められている。状況は、まったくつかめなかったが、言われている言葉は、実能的を射ていて、言葉が出てこない。

『うあゝ！！！！ 本当にはつきりしないね！！ どうなの！？ なんかしゃべりなさいよ！』

高い、つーか甲高い女の声。なんか非常に不条理なんだが。しかも生意気。こんな誰かもわからない言葉を評価する必要も無いけれど。

「誰だよ、あんた」

『誰でもいいでしょ！ つーか何！？ あんたって！ 自分の立場分かってんの！？』

喧しい。うるせえ。

「なんだよ、なんなんだよ、こんな時に！ 黙ってるよ、俺はなっちゃんを助けないと・・・その為に今どうするか考えてるんだよ！」

『なに、八つ当たり？ 自分の無力さ棚に上げて・・・情けないっただら』

「なっ・・・なら、あんたはどうなんだよ！？ なっちゃん助けてくれんのかよ！」

『いいわよ』

「どうせそんなことも・・・え？」

『やってやるってんのよ。あんたがそうして欲しいなら。っていうか、ずっとそうしたいって思ってるのに動こうとしなかったあんたが悪いんだから。あんたがあたしにさっさと気づいてパパと助けてくれつつってたらあの娘がああなることは無かったのよ』

「どうにかできるってのか？　どうやって・・・何をすればいいんだ？」

『あんたはどうもなくていい。ただ、心を無にしなさい。んで、私に意識を預けなさい』

「んなこと・・・どうやってやるんだよ」

『知らないわよそんなの！　そっちで勝手にやりなさい！』

「勝手について・・・」

『じゃないと、あの娘・・・死ぬわよ』

「・・・・・・・・」

『わかった？　ってありや・・・黙つといたほうがよさそうね』

そうだ。俺が出来なきゃなっちゃん死ぬ。なら、出来るか出来ないかじゃない。やるか、やらないかだ。なっちゃんが助かるってん

ならなんだってやってやる。目を閉じて、ただなっちゃんのことを考える。すると、だんだん目の前が明るくなってくる。そして、『俺が俺で無くなった』

奈々の目の前で、ファイブは止まった。

「言葉は要らぬ。死ね」

そついうと剣を振り上げる。そして、その剣を一気に振り下ろした――！！

奈々は、目を閉じて、そのときが来るのを待った。しかし、いつまでも振り下ろされるはずのものが、やってこない。目を開くと、見慣れた背中があった。しかし、その手には見慣れない物を握っている。

「え・・・？」

「貴様、さっきの」

ファイブの声には、驚きと怒りが混在していた。あと一步というところを邪魔された怒りと、先ほどまでとても自分の障害にはなりえないだろうと思っていた少年が、現に目の前に立っている。しかも自分の剣を受け止めながら。その現実を受け入れるには、今の彼は冷静さが足りなかった。

「ふうん・・・これが、一輝の言ってた・・・なるほどね、使いやすいかもね」

「何を、言っている・・・っ！」

亮輔（のすがたをした何か）は、右手に持った剣のみでファイブの剣を受け止めていた。ファイブが力を込めても、ビクともしない。亮輔が剣を一振りすると、ファイブが後退する。

「なんだ、その力は・・・」

ファイブの意識の中を、一つの感情が駆け巡った。こいつは、相手が違う。そう、一度だけ戦ったことがあるが、まるで敵 wasn't なかった。『あいつ』みたいだと。かつての自分の勇気というか無鉄砲振りに是我ながら呆れた。こんなもの相手に、勝負を挑んだというのだから。目の前の、得体の知れない力と剣を持った少年に感じたもの、それは恐怖だった。

「さあ、なんでしょ？ 本当はとくに気づいてるでしょ。ありえないとは思っけどね。私だって、本当に私と契約シンクロできるのがこの世に二人いるなんて思わなかったし」

目の前にいるのは、確かに、亮輔のはずだ。そう、奈々は結論付けた。しかし、言葉遣いや、目の前にある背中から発せられる圧倒的な威圧感。それは、亮輔にあるはずの無いものだった。

「来な、一瞬で終わらせてやるよ」

それは、亮輔の言葉なのか、それとも・・・

ファイブが感じた恐怖は、浮かんだ正体が、自分ごとでは到底敵わない存在だと気づく。しかし、ここまで来て、やめようとは思わ

なかった。どうせ、契約を自分は破った。今ここで奈々を逃がせば、何も出来ずに無駄死になることになる。ならば、答えは一つだった。

「はああああああああああああつ！！！」

大声を出して、自分を奮い立たせる。ここで二人を殺す。そうして、組織からの追手も殺して。逃げ切るために、必要なプロセスだった。

「・・・・・・・・」

亮輔と、ファイブが一瞬交錯する。ファイブの太刀は亮輔の太刀に受け止められ、間髪いれずに振るわれた亮輔の太刀がファイブをすれ違いざまに切り裂き、着地時にファイブは膝を着いた。

「まだやる？ いいよ、次は容赦しないから」

そう言い、亮輔は剣の切っ先をファイブに向けた。ファイブは、どうすることも出来なかった。逃げることも、再び挑むことも。もう、どうすることも出来ないファイブの様子を見て、奈々のほうを振り向いた。

「・・・・あら」

地面に寝転がる体勢になっている奈々を見て、溜息を一つ吐く。

「本当に手間のかかる・・・・おい、亮輔、ありり・・・・こっちもか」

仕方が無いか。そう呟き、亮輔（の姿をした何か）は、奈々を肩に持ち上げ、亮輔はその場から去っていった。その場に一人残されたファイブは、何もする気が起きずに、しばらく制止していた。だか

ら、背後から近づく気配に気づけなかった。すぐに逃げ出せば、少なくともそのための準備をしていれば、逃げる事が出来たのかもしれないのに。

「『アシユラ』、展開」

ファイブの背後に立っているのは、亮輔と同じ年ぐらいの女の子。じっと、ファイブを見下ろしている。

「ファイブ、私、ちよつと怒ってるんだよ？」

「アシユラ・・・『2nd』か・・・」

「契約違反と裏切りは死に値する行為だつて、習わなかった？」

「ふん・・・覚悟は出来ているよ。やればいい」

「言われなくてもやるから、その前に」

ファイブの顔の真横に、『2nd』と呼ばれた少女は顔を寄せる。そして、何も知らないものが聞けば、愛を囁いているようにしか聞こえないような声音で何事かを囁いた。

「さよなら、ファイブ？」

そう言つてファイブの真上に足を振り上げる。その足を、一気に振り下ろした。可憐な印象を与える少女からはイメージしづらい、踵落とし。ファイブは、声を上げることなく、息絶えた。

家までの道を奈々を運びながら歩く亮輔（の姿をした何か）と、その肩の上で寝息を立てている奈々。日常の中にいきなり現れた危機を、何とか乗り越えた二人（三人）に、また新たな脅威が、迫りつつあった。

クルス（前書き）

拙い文章ですが、よければご覧ください。ペコリ。

クルス

・・・夢を見ている。

目の前で、見たことも無い女の子が泣いている。僕は、その子を何とか慰めようと思うけれど、何も出来ない。彼女と僕の間には高い柵があつて、とても近づけなかった。そこから、手だけを出してみるけれど、彼女の許へはとても届かなかった。そのとき、彼女のところに僕と同じくらいの男の子がやってきた。そして、女の子は男の子を見て瞳を輝かせている、ように見えて。僕は、悲しくなる。

あの男の子はこんなにも自由なのに。僕は、こんなにも不自由だ。高い柵で囲まれた部屋。部屋にはベッドだけが置かれている。いたい僕は何をしたんだろう？ 何でこんなところになくてはならないんだろう？ その答えは、僕なんかが知るはずは無かった。ただ、酷く、深く。

寂しいとだけ、感じた。

亮輔と奈々、二人はアパートの一室を借りて二人で暮らしていた。そして、料理はいつも、奈々の担当だった。まあ何回か奈々の代わりに料理を試みたはいいが、その度に奈々に「亮輔は料理はいいから」と断られているのだが。なので、いつも朝食は奈々が作っている。その匂いにつられて、亮輔は目の間をつまみながら、身体を起こした。左右を見渡し、隣に奈々がいるのを発見した。

「・・・よかった」

静かに寝息を立てる奈々の姿。昨日は、何が起こったのか、いまだに自分の中で整理できていないが、それでもいいかと亮輔は思う。今は、隣に奈々がいるだけでいい。と、だんだんと頭が起きてきた亮輔は、この状況に違和感を感じ始めた。奈々は朝食を作っているはずだ。包丁のリズムのいいトントン、という音が聞こえてくる。起きたばかりで、そういえば昨日は昼食以降何も食べなかった。空腹を訴える亮輔の身体には、その違和感など些細なもので、とにかくそこに食べ物があることだけ理解できた。隣に奈々がいることも相まって、昨日からの緊張感から開放された亮輔は何か食事を欲していた。それこそ、今台所にいて食事を作っているのが誰か、ということが気にならなくなるくらいに。

「うむ、ようやく起きたか」

テーブルの上には、一人分の朝食が用意されていた。

「まさか、こんなことになるなんて。一樹のやつ、これも計算のうちなの・・・？」

その少女は今までに見たことのないほどに美しい、と思った。可愛い、でも綺麗、でも無く『美しい』。まるで、作られたもののように。

「ほら、何を惚けてんの？ さつさと食べな。『がつこつ』なんてのがあるんですよ」

言われるまま、席に着く。何よりもまず、腹に物を入れることを重要視していたため、この少女のことは後回しだ。トーストに目玉焼き。横にはマーガリンもある。カップに口をつけると、苦い味がし

た。目玉焼きに少し醤油を掛けてトーストの上に乗せる。そのトーストに齧りつくと、思わず涙が出てきそうになる。ただでさえすぐ腹が減っていた上に、あんなことがあって。でも、一つ思い出せないことがある。昨日変なやつに遭った。そして俺はあの刀を持って、で、気づいたら今日の朝になっていた。俺がああ声を聞いて、なんか変な感じになつて。そこから先、俺が今起きるまでの記憶がすっかり零れ落ちていたようだった。あの時は確か……

「何泣いてんのよ」

こんな感じの聲が聞こえてきて……え？

「何よ。人の顔ジロジロ見て」

俺は少女の顔をずっと見ていたらしい。思わず顔を伏せる。知らない少女とはいえ、やはり気恥ずかしい。いや、知らないからこそか？　っていうか。

「君、誰？」

口調が子供に接するみたいになつてしまう。それを聞いた少女は、口元をヒクヒクと引き吊らせた。

「誰に向かって君なんて三人称使つてんの、アアン!？」

そしていきなりけんか腰だ。わけが分からない。

「誰のおかげで助かったと思つてんの……ああ、その何のことだからまるで分かつていない顔！　この青二才が!!」

んで罵倒される。ますますわけが分からない。

「まあなんとなくそうなんじゃないかとは思ってたけど、こうも見事に忘れられると清清しすぎて尚のことムカツくわ！」

もつとキツク言われる。本当にわけが分からない。

「まあいいわ。私に向かって『君』なんていうその腑抜け・・・じゃない、ふざけた根性に免じて私の名を教えてあげる！ まあ正直、亮輔も知っておいたほうがいいでしょうし、私だけが亮輔って言うのを知ってるのも不公平っちゃ不公平だしね」

少女はぶつぶつと溢した後、亮輔を見据え、凜とその名を名乗った。

「私はクルス。まあ、別によろしくしてくれなくてもいいけど」

亮輔の胸に拳を打ちつけ。

「あんたの事を守ってあげる、言われたとおりに、ね」

俺を、守る？ 誰から？ そんな疑問は、クルスの叫び声によってかき消された。

「ああ、占いコーナー始まっちゃった！ このコーナー終わるまでに家から出すようにって言われてたのに！」

そこからのドタバタはもう思い出したくない。とにかく、亮輔はこんなに学校に行くのが億劫なのは初めてだった。奈々が心配だから今日は休む、という

『あの人は大丈夫。』能力^{ちから}を少し使いすぎただけだから。あんたが帰ってきたら目え覚ましてるわよ』

と、クルスという少女が言うので（それとても拒否できないような剣幕で）その言葉に任せて亮輔は家を出てきたのだ。当然それでも残ると抗議はしたのだが

『あんたがあの人をどれだけ大事に思ってるかは知ってる。だから、亮輔は『がっこう』とやらに行ってきたさい。それがきつと、あの人のためだと思っわよ？』

その言葉のときのクルスの優しい笑顔にそれ以上何も言えなくなっ
てしまつて、今に至る。まあ家を出るときに『ありがと』と伝え
たときのクルスの面食らった顔はしばらく忘れられない気がした。

あいつは、本当は優しいやつなのかもしれないな。

疲れとなんだかやわらかい気持ちを感じた亮輔は、学校までの道を
ゆっくりと歩いた。結果は、言うまでも無かった。

とりあえず、教室に入つたときの先生の笑顔は、先ほど見た誰かの
笑顔とは百八十度違う意味を持つことに気づいた亮輔は、今すぐ家
に帰りたくなつていた。

クルス（後書き）

今回から一話ごとの文字数が減る予定です。やっぱり背伸びは出来ないものだ実感。すいません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6631m/>

神の子供たち

2010年10月10日00時32分発行